

大陸（満州）

戦歴なき軍隊は

運隊であった

愛知県 日比 三千雄

昭和十六（一九四一）年徴集の現役戦車兵として、昭和十七年一月十日入営のため、一月八日、鱈江の歩兵部隊入隊の今泉惣次郎君、中野大八君（兩名とも戦死）と三人、東上駅より盛大なる見送りを受けて出発した。

豊橋駅で両君と別れ、篠田の大塚賢一君及び小坂井町三人、蒲郡町二人と一緒に、名古屋駅にて県出身者全員集合して出発。加古川駅にて乗り換えて部隊

近くの民家に一泊し、十日に中部第四十九部隊（戦車第六連隊教育隊）に入隊した。大塚君は即日帰郷とのこと。

翌日から初年兵としての訓練を受けた。歩兵銃の実弾射撃にてその初年兵教育は終わり、次いで戦車教育に移る。他の者が戦車操縦訓練中、青野ヶ原の松一本を倒したので、晩に教育上等兵より陸軍地図に記入してある松だから注意せよと叱られた。また、朝点呼の集合が遅いと総ビンタを受けた時もあるが、教育隊なるが故にあまりなかった。

約三カ月の教育を受け、春らしく暖かくなった三月下旬に面会を許され、各中隊編成を終わり、満州第二九八部隊より初年兵受領にきた輸送指揮官に引率され、満州東安へ出発した。

広島宇品より「南京丸」に乗船、下関に一泊し釜山に上陸、朝鮮經由の鉄道に乗った。我々は客車にて西東安の野砲隊の初年兵と同乗し東安へと出発し、龍山、元山と国境の凶們を通過し、三日目の夕刻やっと東安駅に到着、各中隊より迎への自動車にて部隊に向かった。

満州はまだ厳寒の冬で、道路は凍結していた。まばたきするとまつげが凍りつく感じと、寒いのではなく痛い感じがした。我々初年兵四百人以上は、満州第二九八部隊（戦車第十連隊）の営門を通過し、各中隊へ配属となる。私は第二中隊第三班に編入となった。翌日はお客様扱いで中隊内の説明にて終わる。次の日から初年兵としての本格的な教育と訓練が始まった。

ところが戦車隊は乗員の大部分は、将校と下士官ばかりで編成されることで歩兵部隊と違う由、また編成で小隊が出来る故、第二中隊の第〇班で事足りるのとことであつた。班内にはノモンハン、関特演の古兵までいて、上下二段とも満員であり、班付下士官も

多勢で、我々初年兵には班長はじめ教育係上等兵、及び二、三年兵と受け持ちの人員が多く、内務班での初年兵の仕事は非常な苦勞であつた。下上官室への食事、洗濯物も多く、演習及び内務班、兵器・被服等の手入れ、食事等の仕事が多く非常な苦勞であつた。

訓練は防寒外套と毛糸の手袋と防寒大手套で行つた。内務班は二重窓で班内一個の大ベーチカで暖をとる。厳寒零下四十度ぐらいでも班内は上衣なしで寒くないのである。零下十五度ぐらいの耐寒耐凍傷の訓練の時だったか、教官の号令で我々初年兵と教育助手の上等兵が一斉に手套を取り素手になると、我々は三分ぐらいで指先が白く凍傷になったが、上等兵は七分から十分ほどで凍傷になり、初年兵との差が出たのだと言われた。後で凍傷部分を赤みが出るまで擦った時の痛さは忘れられぬが、東北からの初年兵が擦らずに班内のベーチカの湯に入れてしまい、指が腐つて切断した例もあつた。

我々の訓練は三八式騎兵銃であるが、訓練が終了して班内に戻つて三十分ぐらい経つと、銃に氷の華が咲

いて美しかったが、後で水気を取る手入れを何度もしなければならなかった。本当に大変だったことが今日でも思い出される。各個訓練等は短期間で終了し、戦車、戦車砲、七・七ミリ機関銃、九五式拳銃等の教育訓練に移った。

また、部隊の春期演習があり、我々初年兵も参加した。訓練中に国境上空に飛行機が飛んでいるのを教官が「昨日、今日と上空を飛んでいるのはソ連軍の戦闘機と偵察機である。一昨日、第一中隊が国境に向かって行ったから警戒のために飛んでいるのだ。越境しないから戦争にはならないが、ソ連としては歩兵の一個大隊より戦車隊の一個中隊の方が重大な事であるからだ」と説明された。

この時の演習は国境線より三十キロ以内とのことであった。また歩兵部隊より二十人くらいの下士官が転属して来たが、初年兵では手が回らず食事だけで、後は全部自分でしていた。戦車隊はこんなに下士官が多いとは知らなかった。「歩兵に居れば神様だったのに、戦車隊に来て馬鹿をみた」と言われるが、我々は聞く

だけで手いっぱい苦勞の連続であった。

だんだん暖かく、五月頃になると訓練も進み、操縦訓練は遠くの原野で行う。南向きの丘の斜面には埋葬者の美しい木箱が多数見られた。冬は全てが凍る。糞尿も凍るから、満人がこれを碎いて吠に入れ、馬車にて野原に捨て山にする。暖かくなればこれがとけて平らになり、この中へ戦車が乗り入れ黄色の水煙を上げる。これを我々は、大陸の陸軍巡洋艦と呼んでいた。

この水煙は戦車の外側だけでなく車内へも入り、その臭いことは口では例えようもなく、訓練にはならず洗い大変苦勞した。

また、道路操縦訓練中、橋が落ちて川の中に落ちた他部隊のトラックを戦車で引き上げたこともあった。実弾射撃は機関銃の射撃を一番多くした。射撃は交代で行い、また戦車より十メートル以内に射撃中の指呼標を立て、戦車に落雷あるも戦車には何ら関係なく、指呼標と立っていた三人は尻餅をつき、一時間ぐらい立てなかったこともあった。戦車砲と拳銃等の射撃もしたが、命中率は六割ほどであった。

六月中旬には各個訓練・操縦訓練・機関操縦訓練にて一期の検閲を終了し、はじめて一人前の兵隊となった。毎晩操縦のダブルクラッチ（減速）の演習も終わった。戦車第二師団（勃利）は戦車第六、第七連隊と第十（東安）、第十一（斐徳）連隊で二個旅団編成。第十連隊第一中隊は「九五式軽戦車」、第二・三・四・五中隊は「九七式中戦車」、第六中隊は整備中隊である。我が第二中隊は中隊長車、第一小隊の四両輛菱型戦闘体型五個小隊と整備小隊で、戦闘戦車二十一両と初年兵教育戦車四両の二十五両とトラック二十五台ほどであった。戦車の乗員は車長または中・小隊長、砲手、操縦手、機関銃手（無線手）の四人または五人で、戦車砲五・七センチまたは四・七センチに改む、機関銃は前方と砲塔後方（高射も出来る）の一砲と二銃と、二百馬力以上の機関と四百リットルの軽油で道路四十キロ、戦闘速度十から二十キロで約八〜十時間運行も出来た。乗員は拳銃・刀、兵は三八式騎兵銃携行であった。東安は軍・師団・各司令部があり、大部隊が駐屯していた。

九月になると部隊は対空と歩兵師団との演習があった。対空演習は、機関銃を戦車上に高射に架し、三発に一発の曳光弾を二十発弾倉にして、飛行機で二百メートルの網で赤白の吹き流しを二百、三百、四百キロの速度で高度三百メートルで引き、これを射撃する。照準は飛行速度に対する楕円形を機関銃に装着する。低速の時は命中が多いが、高速になると悪くなる。

各部隊から選ばれた者が歩兵部隊となり戦車隊と演習をした。この歩兵部隊に対し我が戦車部隊は横一線で戦車砲、機関銃の一斉射撃で前進した。演習後話をしたら、例え演習で空砲と分かっている、近くなると気分が悪くなり演習どころではないとのことだった。また、近く戦車が高速で走ると、速射砲では照準出来かねると言っていた。また、この歩兵部隊との演習を、部隊長たちは小高い山上から観戦して、戦車が百両横一線攻撃は大変見事であったと、中隊長より話があった。

昭和十八年一月になり満州国軍の北滿部隊の將校（中・大尉・少佐）約七十人が冬期戦車教育訓練に米られ、その接待係をした。満軍將校は、過ぐる満州事變の時の兵・下士官が、満軍に志願した人たちである。一カ月の教育中に大体の人たちは凍傷になってしまった。東安はこんなに寒いとは知らなんだと言っていた。満州の寒さは相当慣れているのと思った。

六月頃になって工兵連隊の対戦車肉迫攻撃訓練に三両にて出向く。工兵隊では木製の戦車を人力で引いて訓練をしていた。

到着後、小隊長より戦車の説明をして、將校・下士官・兵共、戦車に乗り降りした。訓練に際しては「せっかく戦車隊が来てくれたから、各人は戦死覚悟で日頃の訓練の成果を出せ」と訓示を受け、各隊順番に始まる。我々は出発に当たり隊長から「工兵隊の一兵たりとも傷を付けてはならぬ、戦車を傷めてもよいから」と命令を受けて来ているから、訓練は慎重にならざるを得なかった。訓練になると、兵は戦死覚悟で爆雷を抱えて戦車に突進して来る。昼食になり部隊長

等と食事を共にし、戦車の諸元を説明される。午後の訓練が始まり、兵隊は新しい隊と交代し突進して来る。戦車は逃げる繰り返しであり、遂に操向板を焼いた。二両共、一時休み、冷やした。なんとか訓練を終わって部隊へ帰り、翌日より修理に出した。毎日整備隊通いであった。

八月頃、戦車十一連隊に動員下令にて、我々も二泊三日で出動準備の手伝いに行った。帰りには砲・機関銃・無線機等の部品及び砲塔上のパノラマ眼鏡と砲と機関銃の九倍の照準眼鏡等をもって帰って来た。

十二月になると戦車師団冬期大演習が二週間にわたり勃利方面が始まり、これに第三小隊の砲手として参加した。厳寒で零下三十度ぐらいで、夜間は保温のため天幕を被せて一時間おきに約二十分交代で運転をしていた。これを怠るとエンジンが動かなくなるからである。

戦車の中は、夏は暑く冬は特別寒い。速度一キロにつき風速一メートル、風速一メートルにつき温度は一

度下がる。このために気温零下三十度、速度三十五キロならば、身体の体感温度は合計で零下六十五度となる。このため冬期演習に出れば、全員鼻は凍傷になり、黒くなって一皮むけた。また冬期戦車に給油した軽油も凍って泡状になり苦勞した。さらに素手で戦車に触れると、車体にすぐに凍り付いて、手を取る時パリックと音がした。今度の演習地の部落は外壕に土壘、内壕にも土壘と二重になっていて、中に部落があった。

夜間、演習で各戦車に工兵隊の四人を乗せ、尾灯一個のみで行進中、前の戦車が外壕へ落ち、工兵隊の四人を落として前進。暗夜で前の戦車の尾灯が進むから、我が戦車もその通りに進んで外壕へ落ちて、前の落ちた四人中三人を戦死させてしまった。また戦闘演習中に左側下部転輪を脱落紛失して修理に苦勞したこともあった。

演習が終わり帰隊して昭和十九年一月になると、小隊長と車付の操縦手は、臺北派遣軍へ転属した。私も

覚悟していたら、二月上旬に、戦車十一連隊の初年兵約四百人を各中隊一人ずつの六人で、東安より引率して図們、釜山を經由して博多に上陸し汽車にて宇品へ、そして船舶練習部へ転属となった。毎日手旗信号の練習をした。練習部にいる時、満州戦車隊の人事係の高橋准尉が少尉に任官して船舶部隊に転属していて「内地は物資が不足しているから」と、私が満州から持って来たのを同僚五人と受け取りに来た。物資、梱包を渡すと、皆に非常に喜ばれた。

この時、高橋少尉の言葉には「日比よ、お前は父親が無いばかりに隊長命により乙幹になったのだが、本当に惜しかったな」と言われたが、運が悪かったと諦めるより仕方がなかった。内地は冬の最中だが、本当に暖かく上衣なしで通した。

三月になると、愛媛県三島市の暁第二九四〇部隊に転属となり、潜水艇乗組員候補者になった。

三月下旬、三重県鈴鹿市石薬師町中部第一三一部隊（気象第一連隊）に派遣され、三カ月間の教育を終了

して練習部に戻った。練習部では我々氣象員百人は五〇〇トンの鋼船で、大阪方面に演習に出て、明石に一泊した時に空襲があり海岸で一夜を過ごした。

紀伊水道を出て鳴門の撫養に一泊し、鳴門水道通過の予定で潮汐表によって朝撫養を出航するも、水道に入る前に高波を受け救命胴衣を三個流した。これを拾って水道に入る。はじめは前に進んでいたがこれが進まなくなり、そのうち後ろへ退き、遂には押し返されて鳴門の渦潮に巻き込まれ一回転した。岩礁が多かったが、これに乗り上げることなくてホッとした。救命胴衣を拾った時間だけ遅れたので水道を通過出来ず、半日待つて通過した。これは船の速度より潮流の速度の方が速いから前進出来なかったのである。そのため船舶は潮汐表によって干潮満潮を調べて航行するのである。

第二回目は大発にて出航。歴史に名高い平清盛の作った音戸の瀬戸を通り、瀬戸内海の難所である来島海峡を通り、佐多岬に沿って西進し、豊後水道にて半日かかって潮流、波高等を観測したが、皆船酔いで白

杵に上陸したものの足がふらついて歩けなかった。別府、柳井に宿泊して宇品に帰り訓練が終わった。ここで天気・風向・風力・波高・潮流等、一応船舶兵の氣象隊員として訓練を積んで編成を待った。

編成については船舶各部隊からの隊員はそれぞれの各部隊へ、そして他の者は中国沿岸へ、南方へと決定して任務に就いた。私一人、船舶司令部参謀部に転属となる。司令部内における任務は、天気図の作成予報・風向・風力・波浪等の指示伝達である。

また、一カ月に二回ほど慰問隊の来訪があった。司令部内の劇場で、乗船前の隊員と共に見物した。有名な俳優の時は見に行かないと高級参謀（大佐）が見回りに来て叱るから、仕事の途中でも見物に行った。また、ある時は一日に二十万トン近くの輸送船等が沈没したと、南方から無線が入った時もあった。これで戦争に勝てるかと思っていた。

十月中下旬頃だったか、戦車第二師団は比島へ出動したらしいとの噂を耳にした。山下大將は関東軍副司令官で牡丹江方面軍司令官であったから出動は当然の

ことと思つた。

十一月になって、戦車第十連隊は船と共に全部沈んだらしいと噂に聞いた。真偽のほどは分からぬが、元の戦友達の顔がまぶたに浮かんだ。字品でも、サイパンに行く途中船が撃沈され、目的地に行けずに帰って来た兵隊達を見かけた時もあった。

昭和二十年一月初め、香川県豊浜町の船舶兵幹部候補生に気象班が新設され本部付として転属した。班長は中尉であり、幹候隊は三千人以上いたと思う。毎日の天気図を作り、予報を行ったり生徒に気象学教育のための資料作りに多忙を極める毎日であった。時には無線機によりアメリカからの放送が傍受出来た。内容は歌などで始まり、何日に何市を爆撃するという放送であるから、初めは本部の週番士官だけが噂にしていたが、日夕点呼後には各隊の週番士官が二十人ぐらい聞きに来ていた。

三月になって、敵グラマン四機に銃撃された。これが入隊以来初めて見る敵であった。六月になり初の休

暇があつて豊橋爆撃の情報を聞きながら出発した。熱田にて空襲警報で停車し、十二時頃豊橋駅に着いた。駅舎は既になく、街は全部燃えており市電とトラックも燃えていた。電車は小坂井より発車すること、小坂井まで歩いた。駅より豊川大橋まで行かぬうちに軍靴の底が熱くなって歩くのに困った。家に帰り親戚・知人を回る。この時、「八月には何か大変なことがある」と軍隊内で噂になっていることを言い残して帰った。また岡山の空襲に遭った。街は全滅だった。炎の中を宇野線を歩いた。

八月十五日、天皇陛下のお言葉がラジオであることで止装して拝聴したが、雑音が多くて何のことだか分からなかった。後で日本は無条件降伏したのだと司令部からの連絡で判明した。八月に何か大変なことがあると言っていたことは、この無条件降伏のことだったのかと非常に残念に思った。

その後は毎日点呼だけはしていた。一週間ぐらい後だったと思うが点呼の時、部隊副官が「今度の戦争で

負けたのは貴様達が米英の傀儡だったからだ」と言っただので、本部付の下士官全員が「俺達は命令で散兵線に散るだけなのに、これは副官たる者の言う言葉か、許せん。今は軍隊はなく、まして階級もない、皆平等だ。敗戦の結果を我々に押し付けるとは何事だ。負けるような命令を出し自分達だけ良い顔をしておきながら、こんな副官は殺してしまえ」と意気が上がり、准尉が中に入り先任将校（中佐）に交渉に行き、話し合いの結果、我々は納得した。副官は部隊解散前にいなくなった。

汽車の都合により九月十四日帰還となり、宇野発東京行の専用列車にて帰る。幹部候補生は乙幹で船舶部隊に転属となり、なんと不運であったと思っていたが、今日では原隊の戦車第十連隊は比島へ上陸前に輸送船と共に沈んでいたことを知り、本当に幸運であったと、今は乙幹になった事を感謝している。と共に、部隊内における種々の問題点も曹長として対応出来たことを自分なりに誇りに思っている。